

2020年度 聖心会みこころセンター講座

講師：シスター菅野敦子「聖マグダレナ・ソフィアのお話」の資料（第1回～第3回）

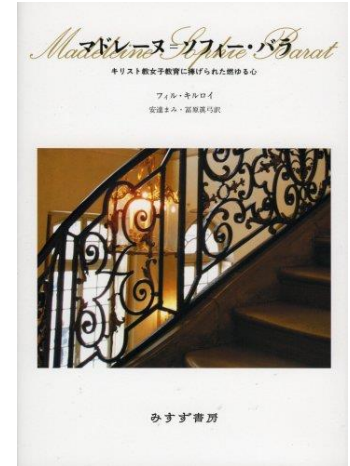
マドレーヌ＝ソフィー・バラ（第1回）

参考図書：『マドレーヌ＝ソフィー・バラ

キリスト教女子教育に捧げられた燃ゆる心』

著者の略歴紹介 フィル・キルロイ Phil Kilroy（1943～）

- アイルランドのダブリンに生まれる。
- トリニティ・カレッジで歴史学を学ぶ
- 博士号取得。
- 女性史・宗教史を専門とする研究者
- 聖心会会員



「マグダレナ・ソフィー」の生涯について

1. 初めに：



《フランスの地図》1800年 ソフィー・バラはアミアンに修道院と学校を設立  
1804年 グルノーブルからパリへ

《パリの重要地名・建物》 アンバリッド通り、ヴァレヌヌ通り、グルネル通り、ドミニコ通り、ブルボン通り、フォーブール・サン・ジェルマン、オテル・ヴィロン、ブルボン宮殿、アンバリッド廃兵院、オルセー美術館

※持参金について・・・弁護士の助言に従って、聖心会への持参金は6フラン。  
パリからアミアンへの旅費の残額だけであった。

## 2. 終章より マグダレナ・ソフィアの遺書の内容 =彼女の生涯と創立以来の聖心会の指導の振り返りに着目

### ◇聖心会の統治を回想

長年背負った責任の重さを認めた。

しかし、一生をかけてたどった比類なき個人的な旅には触れていない

創立期に始まり、成長と発展がもたらした危機を経て、地固めの時期にいたるまでの歳月をかけて  
聖心会を守り率いた個人的業績にも触れていない。

1850年以降、ソフィーは聖心会を創立した女性たちについて頻繁に語った。

それでも、自分に焦点をあてなかった。「85歳ともなると人生は異なって見えるもの。」

### ◇生涯の振り返り

総長ではなく、個人としてのソフィー・バラである

様々な時期における間違いや判断の誤りを回想した。

彼女を悩ましたもの→ 聖心会会員に対する自分の対応

厳格で要求が多く、耳にした批判を鵜呑みにし、性急に行動した。

気分やで怒りっぽく、周りの人に辛い思いをさせた。

若者の会員の養成に心を砕き、手厳しく叱責することもあった。

\*しかし、ソフィーの直情的で、癩癪持ちなところが、活力に満ち、聖心会の危機的な状況に  
あった時に、聖心会を導き、崩壊から救った。

彼女の善き部分→ 約束を守り、最後まで仕事を見届けた。

ほかの人びとの勤労や献身を真っ先に認めた。

ソフィー自身は誰よりも勤勉で献身的な働き手であった。

ソフィーの欠点は自身の生涯の影の部分であり、聖心会の影の部分だった。

### ◇後継者たちへの訓示

聖心会の中心的な目標について

「キリストの聖心についての知識と、聖心への愛を世界に現すことである。

これこそが自分たちの人生の核であり、このヴィジョンが中心になれば、  
聖心会の存在に意味はない。

[マタイ11:28~30・・・私の心は柔和で謙遜なものであるから・・・]

## 3. マザーバラの生涯の行程の振り返り

- ①前進 内気さの影から歩み出る（兄ルイの厳しい教育、ジャンセニズムの影響）  
勇気をふるって指導力を行使

他者との絆を築く・・・仲間に靈感を与えた

深い友情の喜びと痛み（ユージェニー・ドウ・グラモンとの関係）

最も親しい仲間や、社会、教会から拒絶、嘲笑された経験

→このような過程を通して、内なる自由と個人的な力を見出し、控えめに行使された力の威力を示した。

## ②ジャンセニズムからの解放

人間関係からの解放

ジュニーヌ神父、聴罪司祭への告解

→このような過程を通して、自分を解き放し、喜びをもたらす霊性へと変えようとする。

しかし、苦労があった。ファーベル神父の促しにより、ジャンセニズムの神ではなく、  
愛の神を人生に招き入れるという言葉に彼女の霊的な世界を復活への喜びへと解放させた。

——彼女はカルヴァリオの丘で傷ついたキリストの像に仲介された神からの活力を得ていた——

これが「みこころの愛」である。

〈1839年—1851年・・・聖心会の危機を乗り越えるまでの長い期間を脱した後の彼女の解放感〉

・ユージェニー・ドウ・グラモンの死

・1851年の総会

・ルイズ・ドウ・リマングとの友情の回復をしたけれども、関係性が変わった。

「古からの友人の霊性に興味を持てない」と明言。

ルイズは、ジャンセニズムの過酷で厳格な霊性にとどまっていた。

## ③1863年ソフィーの生涯の振り返り

・ソフィーの兄ルイとの葛藤を毎日神父に告解

・自分のことを話すことで、いままでの過去の重荷を下ろす。内的平和を深める方法を見出す。

→これが、彼女にとっての癒し、セラピーとなることを自分の力で見出した。

\*ポーリーヌ・ペルトロウは、ヴァレンヌ通りソフィーと一緒に住んでいたため、

彼女に毎日告解をする理由をきいている。（ポーリーヌは「感ずべき御母」の絵を描いた人）

## 4. 旅立ち ～1865年5月25日被昇天の祝日

\*ソフィーがエミリー・ジラルドに送った言葉（この後、26年彼女は生きる）

「白鳥のように死にましよう。

白鳥は死の瞬間に内なる力をふりしぼり、

それまでの生涯で最も調和にみちて歌います。

聖人も、そのように死が彼らの生涯のもっとも純粋な、

もっとも愛に燃える、もっとも完全な行為なのです。」



\*もう一つの回想《1865年死に向かって》

「私が生き、あれほど苦しんだ場所を、今また、みえています。」

※もともとユージェニーが使用していたかつての私室を訪れる（オテル・ヴィロン邸にて）

## 1. ソフィーと最初の仲間について

1800年11月12日イエスの愛子会入会。メンバーはトゥレーヌ通りで親しかった3人

- ② M・ソフィー
- ② マルグリット
- ③ オクタビー・バイィ (退会)、カルメル会入会
- ④ マリー・フランソワーズ・ロケ (退会1802) ルイス・ノーデの総長使節の訪問。  
ロケの精神異常を認める。

## 2. ソフィーを苦しめた人物について

- ① ニコラ・パッカナーリ : 最初は一般信徒であった。  
—イエズス会の再生が目的であった。  
説得的な雄弁の才を駆使して、彼は新しく男子修道会を創設した。  
この修道会を「**信仰の霊父会**」と名付けた。  
ヴァラン神父の聖心の霊父会とパッカナーリの信仰の霊父との合併を提案する。  
それが「**信仰の霊父会**」である。  
—更に女子修道会 (ディレツティ・ディ・ジェズ) 「**イエスの愛子会**」を設立した。  
プラハの修道女たちは、イエズス会の会則に靈感を与えられた修道生活を模索していたので彼に賛同した。  
のち、ソフィーも強引なヴァラン神父の勧めで「**イエスの愛子会**」に入会した。  
—1802年パッカナーリの個人的生活に関わる疑義が露呈  
教皇庁から : 性的不品行のため教皇庁裁判に掛けられ、投獄された。  
外観をかえたイエズス会士だと疑われた。  
ナポレオンから : 彼が国家権力の転覆をはかり、陰謀をめぐらしていると  
重大な嫌疑を掛けられていた。

### ②サン・テストヴ

- アミアンの学校と修道院の管理を乗っ取ろうとし、ソフィーから実権を奪い、妨害した。
- 修道会の分離に追い込む。アンヌ・ボードゥモンと共謀して、結果的に会の破滅に至る不穏な動きを取って行った。
- ソフィーの総長としての職務を無視し、彼女の総長としての役割を不必要とした。

### ③ユージェニー・ドゥ・グラモン (姉)、アントワネット・ドゥ・グラモン (妹)

マダム・ドゥ・グラモン・ダステルが二人の母。ソフィーに大変協力的であった。

### ④アンヌ・ボードゥモン

サン・テストヴから強い影響を受けた。ソフィーを無視して、修道院長として権力と影響力を与えていた。(ジョゼフ・ヴァラン、ピエール・ロジェ、サン・テストヴと協働し職務乱用。ソフィーの職務妨害をし、会の分裂を招く。

※1815年 3つの修道院創設にあたり、総長選挙の必要性がでてきた

①アミアン、②グルノーブル、③ベリ修道院

- ⑤フェリシテ・デマルケ・・・総長候補
- ⑥アンリエット・デウシス・・・総長候補
- ⑦テレサ・コピナ・・・・・・秘書

### 3. ソフィーを支えた人たち

- ①ジュヌヴィエーヌ・デゼー・・・1803年学校教育の責任者となる（不適切と思って職を外される）
- ②ルイズ・ノーデ・・・ソフィーに信頼を示す
- ③アンリエット・グロジェ・・・慈善活動をしていたが、ヴァランと出会い聖心会に入会
- ④フィリピン・ドゥシェーン・・・1818年メロカ大陸へ派遣される 院長
- ⑤ジョゼフィーヌ・ビジュー・・・ソフィーと共に会の運営にあたる
- ⑦テレーズ・マイシュール・・・神秘家に心惹かれる。ソフィーから愛される。アミアン
- ⑧アンリエット・ジラルル・・・キリスト教婦人会の会員。ソフィーと面会し指導を受ける。
- ⑨マドレーヌ・ドゥ・シャステ・・・革命中に慈善活動。ソフィーと面会し、内的生活の折り合いが  
ついて、入会。
- ⑩カトリーヌ・ドゥ・シャルボネル・・・ボードゥモンの補佐役。彼女に脅かされていた。  
知的で学識があった。ソフィーの篤い信頼を受ける
- ⑪マリー・ドゥ・ラ・クロワ・・・・・・1812年4月聖心会に入会し、会の深刻な分裂に気づく。

(参考) P.113 (キルロイ.2008)

総長ソフィーが小さな家に監禁状態にされたことが記載。  
ユージェニーを恐れていたため、マリーはユージェニーの  
やっていたことを、ソフィーに何も言えなかった。  
後にソフィーのことを理解したが苦しむ。

\*\*\*\*\*

### 4. 第一回総会開催

**1815年** (背景) ナポレオンの復権により中断。その後、ナポレオンがセントヘレナへ流刑となり、ナポレオン帝国が崩壊し、ブルボン王朝が復活

第一回会憲の草案：ジョゼフ・ヴァランとジュリアン・ドゥリュイエと3人で作成

会の崩壊の危機：ソフィーとサン・テストヴの対立

1812年～15年、修道会は崩壊の危機にさらされている状況であった。

- ①2人のシスターが、ソフィーに無断でローマに行ったことをユージェニードゥ・グラモンはソフィーに釈明の手紙で事前に知らせていた。
- ②ポワチエ修道院での問題…ソフィーにつくか、サン・テストヴにつくかを巡って  
会員が動揺していた。
- ③アミアン修道院内の不穏な動き…サン・テストヴの破壊的な分裂を招く統治であったことに  
ソフィーは大反対

第二回会憲の草案：9月半ば、ジョフ・バラン、ピエール・ドゥ・クロヴィエール、  
ジュリアン・ドゥ・リュイエと共に新しい会憲の草案にいそしんだ。

11月1日 第1回総会開催：サン・トマ・ドウ・ヴィルヌールにて

※マダム・ドウ・グラモン・ダステルの所有地

各修道院から代表者2名：院長、ソフィーから指名された終生誓願を立てた会員（最年長）

(グルノーブル) ジョゼフィーヌ・ビジュール と フィリピーヌ・ドゥシエーン  
(ポワチエ) アンリエット・グロジェ と カトリーヌ・ドウ・シャルボネル  
(ニオール) シュザンヌ・ジョフロワ と エミリー・ジラルール  
(アミアン) アンリエット・ジラルール と ユージェニー・ドウ・グラモン  
(キューニエール) フェリシテ・デルマルケ と ジュヌヴィエーヴ・デゼー

総会の草案者：ソフィー・バラ

ジョゼフ・ヴァラン  
ジュリアン・ドルイエ  
ピエール・ドウ・クロリヴィエール

総会参加者にとって重要であったこと：

聖心会創立の〈原点の物語〉を参加者全員が聞いたことが最も重要

ほかに、レオノール・ドウ・トゥネリーの理想について  
イタリアとフランス愛子会の発展  
パッカナーリの失権  
アミアンとグルノーブルの修道院がイエスの愛子会から分裂  
フランスにおけるアイデンティティと一致

総会の承認：1815年12月17日

聖心会の新しい名称の採用…「**イエスの聖心会**」と呼ばれた



総会承認後のソフィーの実権…「終身総長」となる

- 聖職者修道院長の任命
- 各司教区の司教から独立を勝ちとり、司教区間を自由に旅をし、修道院間の人員が容易に交換できるようになった。
- 政府と法的な交渉ができる
- 総会は聖心会の聖職者修道院長をフランスの宮廷司祭ドウ・タレイラン・ペリゴールに依頼。  
(彼の秘書がペロー神父)

→ ソフィーの全会員に向けた手紙の内容は、聖心会の起源・創立神話の記録として、精神的な活動の開始として語られている

ソフィーは、この最初の書簡を「バラ」と署名した。(キルロイ, 2008, P.126)



「聖心会」という名称になったことの説明内容

ソフィーの手紙では、聖心会の目的が明白に表明されている。

- 聖心会は、イエスのみこころへの信仰に基づいて創立された
- 聖なる心の栄光に献身し、会を奉獻する
- 修道会が携わる仕事や機能のすべてがこの主たる目的にかなっていること
- わたしたちはイエスの聖なる心を模範とし、私たち自身が神に身を捧げる
- イエスの聖心の思いや奥底にある摂理とに、より叶う限り一体化する
- 私たちの魂の清めのために働く
- みこころの知識とみこころへの愛を広げるよう促すことに自らを奉獻すること

→ソフィーの念願であった「聖心会会員を束ね、〈一致〉の手立てを身に着けた、キリストのみこころに奉獻し教育の分野で働く修道女たちの一団」という当初の理想の実現であった。

#### 5. ソフィーの〈読書〉が彼女の靈性を形づくった

- 「雅歌」、「新約聖書の福音書」、「聖ゲルトルーデス」「ジェノヴァの聖カタリナ」
- 「シエナの聖カタリナ」、「アピラの聖テレジア」、「十字架の聖ヨハネ」
- 「聖アウグスティヌス」、「聖フランソワ・ドゥ・サール」、「パオラの聖フランチェスコ」
- 「ピエール・ドゥ・クロリヴィエールのヨハネの黙示録」

→ソフィーは、黙示文学への関心を生涯持ち続けた。

個人的な祈りの生活では、神の摂理に深い信頼を寄せている。

自分の人生には、使命が与えられるという感覚を抱きつづけていた。

#### 6. ソフィーが築いた友情のネットワーク

- 自分自身の資質を高めること
- 修道会内部における人間関係
- 書簡や訪問を通して温かい人間味溢れるやり方で個々の会員と連絡を取った。
- 各修道院のシスターと継続的に議論を交わした人：フィリピン・ドゥ・シェーン  
テレーズ・マイシュウ  
アンリエット・グロジェ  
ジュヌヴィエーヴ・デゼー  
シュザンヌ・ジョフロワ

#### 7. ソフィーとユージェニー・ドゥ・グラモンとの和解（キルロイ 2008, P. 140～P. 142）

##### 第1回目の試練：1815年クリスマス

ユージェニー・ドゥ・グラモンがソフィーに告白した内容

- ローマのサン・テストヴと合流せず、聖心会にくみすることをアミアンの修道院に手紙を書いた
- ローマでサン・テストヴの修道会の認可が得られなかったこと
- 総会の仕事を全面的にユージェニーが承認したこと
- ソフィーは、安心してアミアン修道院に帰還
- 5日間ソフィーは一人ひとりの会員と話す  
いかに会員たちが、理想に燃えた人生から、かけ離れてしまったかを指摘した。

○9日間の祈り・・・新たな会憲を振り返ることの提案

聴罪司祭への告解・・・告解をしている間に、ソフィーは会憲を読み上げと解説をした

⇒そのため会員はソフィーが会憲に乗っ取った**総長であることを認めた**

**第2回目の試練**：会員一人ひとりが正式に新しい会憲を承諾するまでの過程

○ソフィーは先ず司教を訪問し聖心会の分裂が解決したことを報告

⇒それに対して司教は胸をなでおろした

○司教は会憲を正式に承認

○ソフィーを聖心会総長として認めた

○準備のため会員たちに黙想に入るように提案した

○ソフィーは皆が黙想中会議を開き会員各自の奉献を準備した。

⇒**そのとき大きな空気の変化が起こる**

(ソフィーに反発していた) 1人のシスターが、アミアンでの出来事を証言し始め、ソフィーに赦しをことう。

そのため、緊張感が解け、他のシスターたちも赦しを乞うことになった。

⇒この場にいたシスターたちは、ソフィーの感動の深さをはっきり読み取った。

ソフィーの赦し(長い間の反感、冷淡さの痛みに対して)

—————> 人間関係への熟慮

互いに抱擁し合い、修道院中に歓喜と解放感がみなぎる

全員から大きな重荷が取り去られた

—————> ソフィーは会員たちの心の中に入り、温かさと命と未来への希望を生み出した

—————> 各自の理想と響き合い、実質的な意見の相違を乗り越える修道生活のヴィジョンを示した

—————> ソフィーはアミアンの修道院の深刻な分裂を解決した

—————> **1816年2月29日正式な奉献の儀式・・・アミアンの危機の終篇**

[参考図書]

キルロイ, フィル. 2008. 『マドレーヌ=ソフィー・バラ：キリスト教女子教育に捧げられた燃ゆる心』

安達まみ・富原真弓訳. みすず書房



マグダレナ・ソフィー・バラ (第3回)  
(パリ、ヴァレンヌ通り—1820～25年—)

\* 1815年 第一回総会

1. 聖心会の基盤を築く
2. 会の目的を表す会則と会憲

\* 1820年 第二回総会

1. 最も大切な目的として聖心会の中で実践の統一  
全ての学校に共通の教育方針  
1810年の学習指導要領の改訂・教育の質の向上の可能性を検討
2. 聖心会の修道院の一致を固めることが緊急課題
3. 急速に拡大する聖心会の全体像を把握する機会となった。聖心会は10の修道院  
総長ソフィー・バラ

6人の総長顧問：統治体制の中核メンバー

- ①ジョゼフィーヌ・ピィジュー (シャンベリー)
- ②カトリーヌ・ドゥ・シャルボネル (ヴィルルバンヌ)
- ③アンリエット・グロジェ (ポワティエ)
- ④シュザンヌ・ジョフロワ (ニオール)
- ⑤ジュヌヴィエーヌ・デゼー (パリ)
- ⑥ユージェニードゥ・グラモン

その他院長：①マリー・エリザベト・プレヴォ (アミアン)

- ②フェリシテ・デマルケ (ヴォーベエ)
- ③ガブリエル・ドゥ・グラモン・ダステル (カンペール)、
- ④フェリシティ・ドゥ・ラランヌ (ボルドー)
- ⑤テレーズ・マイシュー (グルノーブル)

4. 総会顧問たちの宿泊のためのより広い建物の必要性が確認された

→理想に適った物件の議論で、ヴァレンヌ通りのオテロ・ヴィロン物件への入札が決定された

〈オテル・ヴィロンの購入の経緯〉



—フランスにおけるカトリック教会の復活を示す兆候 (P.193)

—もともとアブラハム・ベイラン・ドゥ・モラスの所有物

—ドゥ・メヌ公爵夫人が購入

—ヴィロン公爵アントワヌ・ドゥ・ゴントーの所有。

1794年ギロチンで処刑された。

—公爵夫人の甥の手に渡るが、彼は住まなかった。

—数年間、実業家や芸術家の小団体に貸し、

ここが舞踏会・祝宴の場となった

—ドゥ・ベチューヌ・シャロの公爵夫人が物件を管理 (後に聖心会の教育のために売値を引き下た

—1806～1808 教皇大使カパラ枢機卿の所有物に。

—1811年までロシア大使館。その後9年間空き家。

—**1820年聖心会購入** しかし、ソフィーにとってヴィロン邸購入は心配と懸念の種になり続けたユージェニー・ドゥ・グラモンがパリの中心地に聖心会の校長に任命されたことは、ブルボン王朝の復権と反革命への回帰を意味した。ユージェニーは、貴族出身でその会員であったため国王や王侯貴族の庇護への扉が開かれていた。ソフィーの強い考えは、首都パリで成功することであり、生徒や修練女を引き付けること、公的なイメージを築くこと。この実現のためには、ヴィロン邸が必要であり、グラモンの存在に助けられた。

※ブルボン Bourbon 王朝について：フランスの王朝名。

バロア朝断絶後の1589年にアンリ4世がフランス国王となって始まり、ルイ14世時代に絶対王政の絶頂期を迎えた。フランス革命でルイ16世が処刑されて一時中断、1814年のルイ18世の王政復古で復活したが、1830年の七月革命で王統は絶えた。

1815年の王政復古により王位に就いたルイ18世は、フランス革命による成果を全く無視して、時代錯誤もはなはだしい反動的な政治を行った。この復古王政による政権は、貴族や聖職者を優遇する政策をとり、市民たるブルジョワジーの不満は当然高まることになった。

フランスは、あたかも革命以前の状態に逆行してしまったようであり、

ルイの後を継いだ弟シャルル10世も言論の弾圧、旧亡命貴族の保護の強化などを始めた。

フランス7月革命は、1830年7月27日から29日にフランスで起こった**市民革命**である。

これにより、1815年の王政復古で復活した、ブルボン朝は再び打倒された（1830年7月）

ネクトウ神父の予言：

「当時、まだ人形遊びをしているフランスの少女が、そのうち、自国に聖心に捧げられた修道会を創立するだろう」

⇒彼の予言は、ソフィーと聖心会における彼女の役割への言及であると受け止められた。

※**聖心会の名称の変遷**： イエスの愛子会 → キリスト教婦人愛子会 → 聖心会

5. 教師の養成とカリキュラムの内容

6. 学習指導横領の中身・・・1805年学習指導要領の改訂

授業時間割、授業の数や順序、授業内容と教授法・・・4年間の学習過程と年長の生徒のための

1、2年間のさらなる学習の可能性を網羅していた。

基本的な学習科目（1805）：読み方、文法と綴り方、算数、歴史、地理、文学

1806年追加：宗教、ラテン語、外国語、情操教育—音楽、ダンス、素描、家政学、神話学、手芸

「ソフィーは教科の高い水準を要求」

（シスター・モニック・リュイラー著「マグダレナ・ソフィア・バラ」P.160）

7. 修練期間：

—6ヶ月の志願期、2年間の修練期、教師のさらなる訓練（修道院の院長と校長が訓練）

- ソフィーの教育事業において「教育が万民の権利である。わけ隔てをしてはならない」という教育観であった
- 貧しい子供たちの教育 (P.184)

◆ 〈ヴァレヌヌ通り〉が持つシンボル＝宮廷

ブルボン王朝の舞台として、革命後旧体制の貴族たちが戻ってきた場所として有名

—オテル・ピロンは贅沢で豪華で意匠を凝らしたロココ主義の建築様式

—セーヌ川左岸国王の宮殿のあるフォーブール・サン＝ジェルマンの中心に建てられた。

チュイルリー宮殿も並ぶ

—パリの貴族の生活の中心地として知られていた。貴族的排他主義の砦であった。古い価値観と伝統保存を維持するこの地に聖心会の中心を設置したことにより、聖心会の危険性をはらんだことになった。

(P.193 ソフィーの苦しみ)

—この地区は5つの長い通りからなっていた

ブルボン通り、ヴァレヌヌ通り、ルニヴェルシティ通り、グルネル通り、サン＝ドミニク通り

多大な権力と任命権がパリ市のいくつかの通りに集中していた

—貴族階級の子供の学校として評定が定着。

———〉 そして、学校は成長と拡大をもたらした

聖心会の公的なイメージの構築の必要性があった。しかし、修道会の清貧の生き方も強調。

ソフィーの本質的会の目標は、修道生活の質素と清貧

実際、ソフィーは修道者の質実剛健の精神を養成した

ちょっとこぼれ話

ロダンの有名な彫刻の一つ（ロダン美術館内に展示してある彫刻）



題：「カテドラル」

男性の右の手と女性の右の手。ひとりでは物事が完成しない。